

# 「英語教育改善プラン」に基づいた教員の英語力・指導力向上に向けた取組

## 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～鹿児島県～

本県の課題： ① 統合型言語活動を中心とした授業改善と評価について → 英語による授業実施率及び学習到達目標設定状況に課題  
 ② 教員の英語力向上 → 英検準1級相当以上の取得率が全国平均を下回る現状あり

課題解決のための具体的な対策： 研修協力校における授業実践を通しての授業改善及び学習到達目標に基づく評価の在り方の推進  
 外部専門機関と連携した教員研修の実施（TOEIC IPテスト受検）及び英検準1級受検料助成

### 【具体的な取組内容】

- ① 研修協力校を指定し、運営指導委員による指導助言を単年度ないし3カ年継続で行う。
  - ・ 「英語による授業」と「4技能を統合的に活用する言語活動を取り入れた授業」の推進
  - ・ 「CAN-DOリスト」に基づいた授業計画・実践、評価の在り方の推進（中・高）
  - ・ パフォーマンステストの実施促進（高）
  - ・ 小中高連携の促進（公開授業・授業研究）
  - ・ 外部検定試験の活用（英検）
- ② 教員研修
  - ・ 英語教育推進リーダー域内研修（小・中・高）
  - ・ 教育実践研究会における実践報告（高）
  - ・ 外部専門機関と連携した英語教育改善研修会（高）及びTOEIC IPテストを実施

### 【成果の波及・周知】

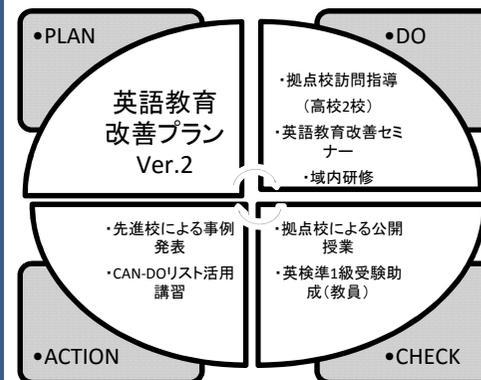
- ① 研修協力校（高校）における第2回運営指導委員会を公開、域内の小中高の教員に参加を呼びかけ、授業研究を通じた研修を実施した。また、研修協力校（高校）が県高等学校教育研究会英語部会研究大会にて取組紹介を行った。
- ② 「英語教育実施状況調査」の結果を県下の中・高等学校へ周知し、本県の現状を認識させるとともに、授業改善やCAN-DOリストの整備、英語担当教員の外部検定試験受験促進等を図った。

### 【成果と課題】

- ・ 授業中における英語使用状況が、教員、生徒ともに改善され、「英語による授業」を基本とした授業改善が進んでいる。特に中学校においては生徒の言語活動の7割が英語で行われ、英語担当教員の英語使用状況も授業内の半分以上を英語で行うようになった。一方、高校では生徒の英語での言語活動は4割程度にとどまり、依然として改善を推進する必要がある。
- ・ CAN-DOリストの整備状況は高校については100%を達成したが、リストの公表及び学習到達目標の達成率については50%未満にとどまった。今後も引き続き授業設計及び評価の在り方について研修を深めなければならない。

### 【課題解決のための手立て】

- (1) 「英語教育改善プラン2nd Ver.」  
英語教育改善拠点校（高校）を2校指定、「統合型言語活動を中心とした授業づくりと評価」をテーマに授業改善を推進すべく指導主事等による訪問指導を実施
- (2) 英語教育改善セミナー（2地区）  
県本土と離島地区で大学教授等による講演及び先進校による実践事例発表および研究授業の実施
- (3) 英語教育推進リーダー域内研修  
研修内容を踏まえた授業実践の共有（動画またはマイクロ・ティーチング）



## 平成28～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～鹿児島県立鹿屋高等学校～

### 現状の課題解決のための手立て

- ・読解/聞き取りで理解した内容を書く・話す活動につなげるリテリング，ディクトグロスを行う。
- ・まとまった英語を話し，自分の意見として発信する能力の育成のために各課ごとにリテリング，ディクトグロスを行う。

### 具体の取組の内容

- リテリング** 1)教科書で扱う長文を速読・スキミングで読解練習。情報の取捨選択のコツをつかみ，後にリテリングで活かす。  
2)各パートごとにリテリングしやすいように内容理解を十分に行う。
- ディクトグロス** 1)教科書テキスト各パートごとに内容理解・音読・バックトランスレーションの練習を行う。  
2)各パートのキーフレーズやトピックに応じて，テキストに掲載されていない情報を60語前後の英語に指導者が準備。  
3)生徒はナチュラルスピード3回とポーズを含む音読1回を聞き，グループで英文を再現し，3～4人で協力し英文を書く。

※いずれの活動でも授業の導入時にSmall Talkで英語を使う活動を継続した。

### 成果①

・Small Talkを毎回実施したこと，実技テストを定例化したことで英語による発表に抵抗感が少なくなった。

・リテリング活動で最低限これだけは言おうという基本的な情報を大部分の生徒が言えるようになった。

### 成果②

・まとまりのある文を書く/話す練習を繰り返すことで，英検/GTECのWriting対策がしやすくなった。準2と2級合格者増。

・模試や実力考査において，文法問題・リスニング分野がそれぞれ伸びている。

### 今後の課題・方向性

- パラフレーズしたり，まとまりのある文章を自分の言葉で短く言い換える力につなげられている生徒は少ない。
- 模試等で徐々に力がついてきた文法・語法の力を表現力につなげられるよう，今後もリテリングやスピーキングの表現活動を継続させる。

現状の課題と課題解決のための手立て

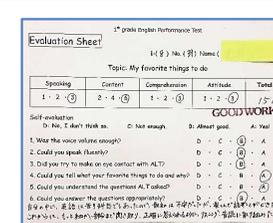
【課題】生徒の、英語による表現活動を活性化するにはどうすればよいか

【手立て】

- ・4技能統合型、自己表現活動を取り入れた授業を目指した工夫・改善
- ・パフォーマンステストの実践とCAN-DOリストに基づいた評価の検討と実践

具体の取組の内容

- ・毎年、各学年で設定したテーマに基づいて、授業改善を目指した。
- ・各学年でパフォーマンステストを実施し、その在り方を検討した。
- ・CAN-DOリストを反映させた評価方法の検討と実践に取り組んだ。
- ・授業公開や、相互参観、教科会等でアイデアを共有し、実践した。



成果①

・「話す・書く活動」に対する生徒の自己評価が高まった。

CAN-DOアンケート調査結果(H28年度2年生とH29年度3年生比較)において、「できる」という回答の上昇ポイントが平均で、「読む」は13、「聞く」は11であったのに対して、「話す」は17.4、「書く」は15と高かった。

・実用英語検定の受験者と合格者が増加した。特に準1級の受験者が増加し、H29に4名、H30に5名(H30. 12月現在)の合格者が出ている。

成果②

【生徒】

自己表現活動に対する抵抗感が減り、意欲が高まった。

【教師】

・授業における教師の英語使用量が増加した。  
・言語活動の高度化に向けた取組や授業改善への意欲が高まった。

今後の課題・方向性

・自己表現活動における即興性、論理性、正確性を向上させるにはどのような手立てが必要か

・「聞く力」を高めるにはどうすればよいか

→ 3年間を見通した上で、日常の授業での重点取組を明確化する必要がある。

・自己評価と客観的テストの結果とのギャップをどのように埋めていくか

→ CAN-DOリストや評価方法を見直していく必要がある。

### 現状の課題と課題解決のための手立て

- ・テキストの理解に終始するのではなく、生徒が「英語で学ぶ」ことを目指し、「聞く」「読む」「話す」「書く」活動の実践を増やして総合的コミュニケーション能力を育てる。

### 具体の取組の内容

- ・授業の冒頭で帯活動として、オーラルイントロダクションで題材や言語材料を導入する。
- ・学年に応じて、まとまった量の英文を書く課題を設けて評価する。(1年・50語,2年80語,3年100語)
- ・授業に関連した題材に基づいて調べ学習をさせ、プレゼンテーションの機会を設ける。
- ・自校のCan-Doリストに基づいて年2回生徒に意識調査を行い、授業改善に役立っている。
- ・保護者にも年1回意識調査を行っている。
- ・英語改善プランに関わる研究授業を年2回実施し、うち1回は近隣の学校(小・中学校を含む)に案内を出して公開授業を実施している。また授業後の授業研究を通して、小・中・高の連携を図っている。



### 成果①

- ①意識調査
- ・英語で授業をすることに関して、生徒は好ましいことと考えている。(1年56%,2年74%,3年66%・H30年11月調査)
  - ・特に「話す」「書く」の発信力を伸ばしたいと思っている。(1年69%,2年56%,3年67%,H30年11月調査)
- ②外部試験を活用した英語力  
(H28年入学生追跡,GTEC全体グレード)

	1年次	2年次	3年次
トータル	4	4	4
リーディング	4	4	4
WPM	85.7	80.4	89.5
リスニング	3	4	5
ライティング	4	4	4

### 成果②

- (職員)
- ・職員が単元全体を見通した授業計画を立て、指導するようになった。
  - ・校内での相互授業参観が活発になり、英語科内で指導観を共有できるようになった。
- (保護者)
- ・保護者も英語教育に関心があり、卒業時には69%(H30,11月調査)が英語検定2級を取得してもらいたいと考えている。
  - ・保護者の90%(H30,11月調査)は英語による授業を好意的に捉えている。
  - ・「話す」技能を保護者は身に付けて欲しいと思っている。(75%,H30,11月調査)

### 今後の課題・方向性

- ・スピーキングのインタビューテストを実施したが、3年間を見通した実施には至っていない。同一学年のスタッフの横の連携だけでなく、英語科職員の全体の意思疎通を図り、3年間通してのシステムを構築していく。
- ・教材をよく吟味・研究して、年間を通した指導計画をより充実させていく。
- ・特に「書く」「話す」ことに関する評価を研究して共有し、指導改善に活かす。